

第一章 明治・大正期の西洋近代医療

く喜連川病院の検案書・診断書綴りよりく

この項では、明治四十五年から大正三年（一九一二）～一九一四年）の『検案書／診断書綴』に記載されている内容を中心に紹介し、ごく一部だけではあるが保存されている同時期の『禮施布篤（列設布篤なども書きレセプトと読む）』と表題されている患者個別の処方記録簿の類もできるだけ判読し、併せて他の文献等も引用して当時の医療を振り返ろうと思う。

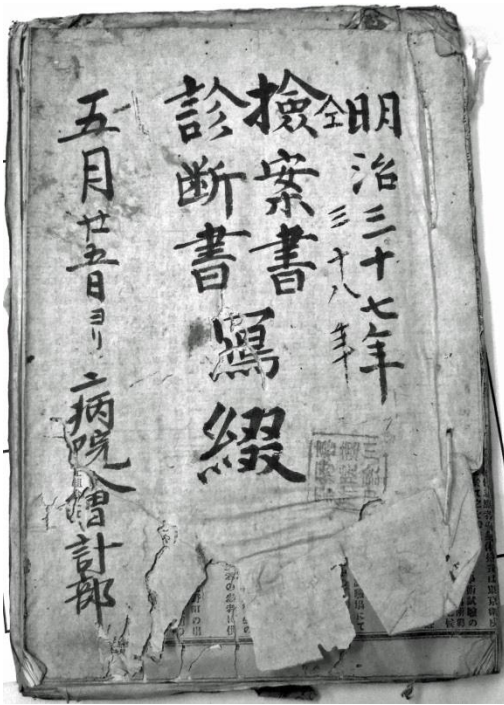
『禮施布篤』は当て字であり、特に意味があるとは思えない。種々の漢字が当てられていて『処方』の意味と思われ、当時の他の医院にも同様の文書が残されていて、

同じく病名、患者名、診療日、処方などが記されている。表紙には喜連川病院会計(部)とある。縦書きの専用の便箋で、中央の折り目に「列施布篤 喜連川病院」と印刷されている。(写真1,2,3) 大正二年の最終番号は一三四七である。異なる番号に同一人物が何人かいるのであるが、一三〇〇人位が受診したことになる。そう仮定すると、死亡診断書は四六通であった

『検案書／診断書綴』を見ると、死亡診断書のほかに死産証書と伝染病の届け出、各疾病の診断書、さらに健康である旨の診断書等の写しが綴られている。この三年の間、死亡診断書・屍体検案書・死産証書の発行された件数は一七九件である。このうち二八件は死産証書であり、一五一件が死亡診断書・検案書である。このなかで死亡時の年齢が記載されているのは一二三件ある。年齢分布は、日齢一日から八〇歳まで

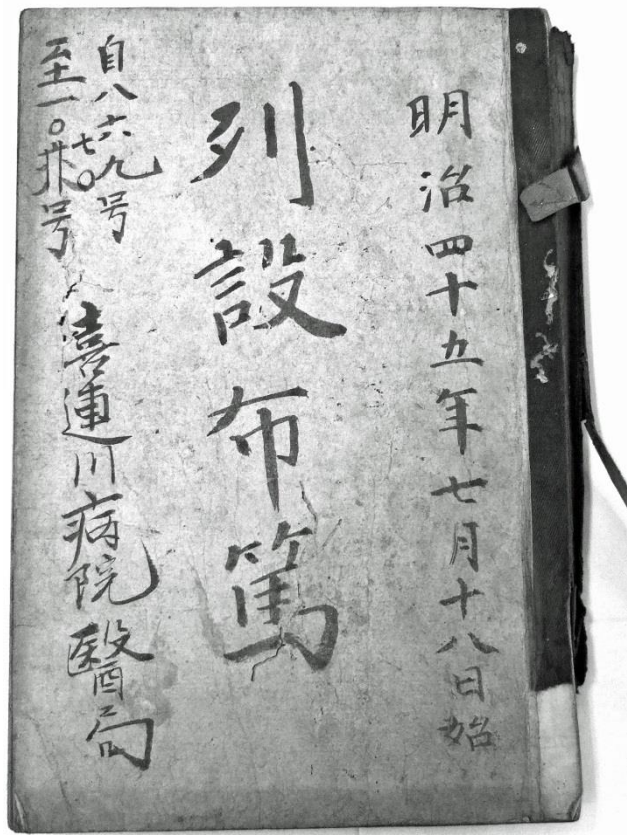
である。診断書と禮施布篤（以下レセプトと表記）を合わせて見ると、現在の内科、外科はもちろん、産婦人科、小児科、皮膚科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、整形外科や精神科、さらに齒科まで幅広い疾患に対応していたことがわかる。

写真1 明治三十七年檢案書（診断書写綴）（病院會計部）



表紙は、活字印刷された書物で裏打ちされている

写真
明治四十五年七月列設布篤 (喜連川病院医局)
レセプトの表記や写真は第二部二にある。



明治四十五年七月十八日始

列設布篤

自八六九号
至一〇七〇号
喜連川病院医局

写真 ②

明治四十五年五月の禮施布篤の内容。

ページ右端に列施布篤の文字。この部分で折りたたまれた。表記は異なる。その時の気分によるものなのだろうか。

同時期でも、レセプトの漢字

